

令和6年9月21日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

令和6年度 第8回

おはようございます。只今、塚越参事の開会挨拶がありました。塚越さんの話は人に元氣を与えますね。知足、縦の学び・横の学び、こういうものを皆くろめて、学ぶことによって幸せを感じる、そして人生を充実させると言っておられました。ある程度歳をとったら、朝起きた時「おお、目が覚めた。今日も生きている」「幸せだなあ」、夜寝る時「今日も一日、良い日だった」「明日も一番幸せな日になるだろうなあ」・・・こういう感覚がふっと浮かべば、この世に生まれてきた甲斐があると思います。塚越さんの話を聞き頭に浮かんできました。良い話でした。

論語に学ぶ

本日のテーマに入る前に、中斎塾フォーラムは論語を勉強する会ですから、やはり論語を申し上げないと落ち着きません。レジュメにありませんが、私の頭の中にある論語をいくつか申します。ご一緒に素読を致しましょう。

○「君子は義に喩り、小人は利に喩る」・・・君子は義（人の道）に従って行動をする。小人は自分自身の利益だけを追い求める。

○「明日に道を聞かば、夕に死すとも可なり」

洪澤栄一曰く、「維新の志士たちは、この言葉を金科玉条と心得ていた。私も高崎城を乗っ取り、兵を起こして横浜の異人館を焼き討ちしようと逸りに逸った、猛りに猛った時は、この言葉が自分の中にこだましていた」と残しています。

やはり自分自身の心を奮い立たせる、ここ一番という時には、自分の頭の中にパッとひらめく言葉があった方が良いですね。中村天風先生は生まれて初めての真剣勝負の時、幼い頃にお爺さんから言われていた「真剣の勝負は、しいだま（度胸）ぞ」という言葉が頭の中にパァーッと閃いたと語っています。

皆さんは論語を学んでいるのですから、これは私の言葉にしよう！と思うようなものを発見していただくとよろしいと思います。

○「利に放りて行えば、怨多し」

目先の私利私欲で動くと、後でとんでもないしっぺ返しが来るものだ。目先の利益につ

られて行動してはいけない、と渋澤栄一は解説しています。

渋澤栄一は、銀行業を営んで世のため人のために尽くすことを自分自身の天職と心得ました。外国で学んだ、外国に追いつき追い越すような職業を日本に広げたい。それが世のため人のために尽くすことであり、具体的な職業としては銀行業が一番それに適していると考え、日本で初めて銀行を創りました。

渋澤栄一の倫理観が分かるエピソードを申します。

銀行業を営んでいると、例えば、政府が後押しをして経済界の大物が出資をするような、新しいビジネスを発足させる、という話がいくつも聞こえるわけです。渋澤栄一は、「その株を買えば儲かると分かっているけれども、私は絶対それには手を出さなかった。これは自分自身で誇るべきことである」と語っています。

ただ、その会社が志と違って途中でうまくいかなくなり、応援していた経済界の人間がどんどん手を引き、政府も及び腰になる。そういう時は私財を投げ打って、その会社のテコ入れを図りました。結果として、その会社が大きく育ち配当が沢山出るようになった場合は、配当を貰いました。それについて栄一は、「義（人の道）に立った判断が長期的な目で見ると利益をもたらしてくれたのであって、決して目先の欲につられて株を買ったわけではない」と言っています。邪推する人間もいるかもしれないが、そうではないことを自分の行動で見てくれ・・・という気持ちもあるのでしょうか。

もう一つご紹介します。渋澤栄一が銀行家の心構えを銀行員に訓示した内容です。銀行はお金が必要だと思ふところにお金を貸し出すわけです。しかし商売というものは全部順調に進むものではなくて、返せなくなる人が結構います。お金が返せなくなって潰れる状況になった場合、銀行は徹頭徹尾助けるといふことはしない。どうにもならないと思つたら、約束通り担保物件を処分して銀行に戻しなさい。そうしないと銀行業が立ち行かなくなる・・・と訓示しています。つまり自らの責任を重んじる、「天は自ら助くるものを助く」というスタンスだったわけです。

中村天風先生（第2回）

では、テーマに参ります。本日は中村天風先生の第2回です。

1、略歴

略歴については前回、具体的なことをいくつか申しましたので、さらっと参ります。

天風先生は92歳で亡くなりました。天風先生の人生の最初の分岐点は、16歳の時、頭山満に預けられたことです。天風先生は中学の時、喧嘩をして相手を殺してしまいました。両親がどうにも面倒をみられないということで、頭山満に預けたわけです。天風先生にと

って頭山満は一生涯の師でした。ずっと尊敬し続け、頭山満の言う事はすべて素直に聞いて行動に移しました。

30歳の時、奔馬性結核という病気になります。あちこちの医者に見てもらいましたが、治せる先生はいませんでした。最後は日本で第一人者である北里柴三郎先生に見てもらったけれども、もう助からないと死を宣告されてしまいます。そこで天風先生は、世界中を探して歩けば自分の業病を治してくれる医者がいるのではないかと、日本を出てアメリカからヨーロッパと尋ね歩きました。

途中、フランスでは哲学者カントの伝記を読んだ感動したといます。カントは生まれつき胸に病を持ち、長くは生きられないと言われていました。17歳の時、町に巡回に来た医者から「体は治らないかもしれないが、心は病んでもいなければ苦しんでもいない。辛いとか苦しいとかマイナスの言葉を言っても、両親が悲しむだけだ。不平不満を感謝の言葉に変えて、毎日を過ごしなさい」と教わったのです。カント青年はその言葉の通り過ごしていたら考え方が積極的になって、天風先生曰く「人間としての背骨をがっちり作るようになった」、そして大哲学者となって79歳まで生きたそうです。

天風先生は旅の途中で読んだカントの話を、インドでの修行中にカリアップ先生の話聞いて思い出したと語っています。

35歳の時、天風先生はもう自分を治してくれる医者は見つからないと諦め、日本に帰って死のうとフランスのマルセイユから船に乗りました。その時の心情を天風先生はこう語っています。「日本に帰るつもりでマルセイユのほの暗い港を旅立ったのであります。もう失望のどん底。文字通り、息をしている屍がそこに一個あったというのが本当だというくらいに、私は失望しちゃった」

その船の中で運命の師であるカリアップ先生に巡り会って、修行を始めたわけですが。そして悟りを得て、病も克服し、カリアップ先生から「もう私のもとにいる必要はない。日本に帰って、世の中の人たちを救いなさい」と背中を押され、日本に帰ります。

日本に帰る途中、満州で孫文率いる革命軍に協力し、帰りに相当な金銀財宝を貰ったものですから、帰国後そのお金をもとにして銀行の頭取になったり、会社を作ったりして好き勝手な人生を送ることになりました。

或る日、奥さんから頼まれて5、6人の前で話をする事になり、カリアップ先生から教わったことを話しました。すると、とても気持ちが良かった。芸者をあげて遊び回るより、人様に尊い話を聞かせる方がよほど気持ちが良いことに気が付いたのです。そこで一念発

起して自分の財産を全部処分し、大道で話を始めたのが43歳。その後も各地で講演を続け、後に天風会を創り、その会が公け認められ財団法人天風会となったのが、86歳の時です。

以上、大まかな略歴を申し上げて前半は終了致します。

後半の講話を始めます。天風先生の話の前に少し余分な話を致します。

一昨日、新白河にあるJR東日本の研修施設内にある「事故の歴史展示館」を見学して来ました。三河島事故や、川崎の脱線転覆事故等、多くの事故車両が展示されていました。大きな施設で、横倒しになった車両を2階から見下ろせたり、地下からも車両の内部が見学できるようになっていました。

多くの死傷者を出した三河島事故とは、脱線した貨物列車に後から来た車両が赤信号に気が付かず衝突し、脱線。中にいた乗客が線路を歩いて駅の方に向かっていたところへ、反対方向から来た車両が突っ込んで大勢の乗客を跳ね飛ばし、死者160人、負傷者358人という大惨事となりました。この事故がJRの安全の原点となったと聞きました。赤信号に気がつかなかったことが原因だったわけですから、とにかく防護することを徹底して教育をし始めたことが一つ。もう一つは、ATSという装置を使って自動的に列車を止めるといった物理的な対策をとるようになったそうです。

川崎の脱線事故は、工事用車両が最終電車の通過前に線路に入ってしまう衝突しました。誘導する人間は何本かある線路の、「この線路まで入っていいよ」と言った。しかし、工事車両を運転する人間は「いいよ」しか聞こえなかった。JR側の説明としては、お粗末な会話が原因でした。そこで出来た対策が、確認対話だそうです。つまり同じ言葉をオウム返しに言って、お互いに確認するということです。

問題が起きた時には、必ず原因があるわけで、その原因を究明して対策を練る。JRがこういう見学施設を作ったのは、特に新入社員や仕事に慣れて来た人たちに、それらを徹底して教育する。何度も何度も繰り返し教えないと、事故はすぐ風化するので、風化させないために展示しているのだと説明して戴きました。見に行ったら良かったと思いました。

2、健康

では、天風先生の続きに参ります。

④ 我とは、何か

・私はね、最初この体が自分だと思ってた。

天風先生はキャリアアップ師のもとで修業を続ける中で、様々な導きを受けて悟りに至るわけです。キャリアアップ師とのこんな問答があります。

「中村三郎、お前は何だ？」

「はい、私は中村三郎です」・・・そう答えた時、天風先生は体をイメージしていました。

「馬鹿者、お前は自分の体を自分だと思っているのか」

天風先生は一生懸命考えるわけです。そして、体は自分を動かす道具だと師に言われ、はっと気がつきます。その体は、自分の心がこう動けと命令をしている。では、心を動かしているもの自分は何なのだと考えていくと、「氣」であると悟ったのです。

ここは、そう簡単に分かる話ではありませんから、意味がよく分からない方は聞き流して結構です。

・分光器で見ると、人間の肉体の回りを包んでいるひとつの氣のあることが発見されたんです。

その当時の話ですから、そのつもりでお聞き下さい。人間の体を可視光線で調べると、七層に分かれた氣に包まれていると分かったそうです。いわゆるオーラという言い方をしますが、その七層の色を見ることができる人間が世の中には結構いるようです。また、科学的に見ることもできるようです。

ただ、人間は自分の体で感じないと分かりませんね。ちなみに前回、息の話をしました。今回は血液です。怒り狂っている時の血液は、苦い。恐怖に震えている時の血液は、酸っぱい。悲しみに打ちひしがれている時の血液は、渋いのだそうです。これも、自分で体験しないと、これ以上は何とも言えません。

ということで、「我とは何か」・・・自分自身の本体は「氣」であると天風先生は言っています。

㊤ 病

・昭和5年ごろ、私、のどに癌ができたと言われちゃった。

天風先生が癌になったのは44歳の時です。この言葉は天風先生が80歳近くになって、語っています。天風先生は癌をどうやって治したのかというと、心の持ちよう、つまり積極的なものの考え方です。「何でもプラスに考えるようになったら、宇宙エネルギーがどんどん体に入ってくる」と言っています。

私は以前、絶対絶命でもうどうにもならない、何も打つ手はないと追い詰められて完全に万歳だと思った瞬間、体の奥底からもの凄いエネルギーが吹き上がってくるのを感じたと申しました。それを私は人為的にやりたいのですが、なかなか出来ないままで今に至っ

ています。

天風先生はそれを「宇宙エネルギー」という言い方をしています。天風先生は天の声を聞いて、天と自分が一体化したという自覚を持ったら、自由に宇宙エネルギーを自分の体に巡らせることが出来るようになったそうです。ですから、宇宙エネルギーを戴くことが出来れば長生き出来る。癌になっても氣にならない、という話になります。

ちなみに私は以前、癌だと思ったことがあります。しかしお医者さんからは「あなたのは、癌ではありません」と言われました。では何ですかと聞くと、悪性腫瘍だということです。悪性腫瘍と癌は違うのだそうで、医学的な定義があるようです。更に、私は70代になって体にメスを3回入れました。でも、体は丈夫です。

心の持ちよう、考え方で、天と繋がっているという意識を持つと、自分の本来持っているエネルギーが出てくる。そうすると癌も恐れることはない、というのが天風先生の考えです。

⑤ 真剣勝負

・生まれて初めて真剣の前に命のやりとりをする土壇場に立たせられた。その時、私は爺の言葉をヒョイと思い出したんです。

天風先生のお爺さんは、柳川藩藩主の立花家伯爵、立花鑑徳という人物です。鑑徳は晩御飯の時、必ず天風先生を呼んで「何でも好きなものを食べてよいぞ。もっと近う寄れ」と言って話を聞かせました。食卓には食べ物が沢山並んで、給仕する腰元が3人もいたそうです。天風先生は御馳走を前にして、早くお説教を終わりにしてくれと思って聞いていたといいます。その時お爺さんはよく、「命がけの真剣勝負は、しいだま（度胸）ぞ」と言って聞かせました。

天風先生が満州で馬賊と闘った時、雲をつくような大男が青龍刀を振り回して向かってくる。「殺されると思った瞬間、爺のこの言葉が聞こえてきた。その瞬間、無我夢中で刀を振り回したら、その途中で、俺は生きている！と思った。それが最初の真剣勝負だった」と語っています。

命のやり取りをするような真剣勝負の時には、何かフツと浮かぶのでしょうかね。浮かばなければ死んでしまうのでしょうか。いざという時、何か浮かぶものがあれば良い、とお考え下さい。

3、カリアップ師の言葉

・何と世界一お前は幸福な男よ

これも天風先生とカリアップ師の会話です。カリアップ師から「世界一、お前は幸福な男よ」と言われ、天風先生は「そんなことはありません。私は一番不幸だと思っているんです」と答えました。

カリアップ師から「お前は病があるから、こうやって私と話ができるんじゃないか。病があるから、一生懸命生きる道を考えてられる。病に感謝しなきゃダメだ」と言われ、天風先生はガンと頭を殴られたようなショックを受けたわけです。そして、「なるほどそういうものか、俺は間抜けだったなあをつくづく思った」と語っています。俺は馬鹿だったなあと素直に思えたから、中村天風という人物が生まれたのでしょうか。

良い師匠に巡り合っても、師匠の言葉を受け取る準備が弟子になれば受け止めることは出来ません。カリアップ師は最後に、俺は沢山弟子を持ったけれども、最後の最後にお前に巡り合えて良かった。お前という弟子を持って俺は幸せだ・・・という内容の話を残したそうです。良い師匠と良い弟子が出会ったのだなと私は思います。

恒例の質問

お時間になりました。最後に恒例の質問を致します。今現時点でお考え下さい。

- 良い日がずっと続いていると思う方
- 嘘はつかないし、つかれもしない方
- 有難うとよく言っているし、言われている方
- 身体の手入れをよくやっている方
- 自分磨きもよくやっている方
- 昨晚眠る時、マイナスは考えない。プラスのことを考えて寝た方

本日は講話の時間が短縮でしたので、端折った言い方になりましたけれども、皆さん良く手が挙がりました。結構でございます。

本日の講話はこれで終了に致します。有難うございました。